



Title	懐徳堂の和学
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1954, 10, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懐德堂の和学

小島吉雄

わが大阪大学国文学研究室では、先年文部省の科学的研究費の補助を受けて、近世に於ける大阪和学の研究を続けてゐる。本特輯号は、その研究成果の一端である。

われわれの謂ふ和学とは、言ひかへれば日本古典学である。それを何故に特に和学と言つたかといふと、これは所謂国学と区別せむがためである。荷田春滿から加茂真淵、更に本居宣長へと發展していった国学の古典研究の上に示した功績は實に大きく、かつその勢力は全國を風靡したものであるから、近世に於ける日本古典学は国学によつて代表せられるが如き觀があり、従つて近世日本古典学即國学といふ風に、常識的には考へられ易い。しかし国学にはわが國固有の國民精神の本源を究明して、古道もしくは神ながらの道を宣揚しようとする明確なイデオロギーがある。そして、仏教とか儒教とかの外來思想を排斥し拒否する偏執を持つてゐる。ところが、契沖の學風などには、さういふ國学的なイデオロギーが強く出てゐない。儒教をも仏教をも必要とあらば進んでこれを利用するのであって、国学に見るが如き排他的な点がない。国学も近世日本古典学の一つの在り方であるけれども、契沖の如きもまた近世日本古典学の一つの姿である。われわれがここ

に和学といふ言葉を使用するのは、國学的性格を帶びざる契沖の日本古典学の如きを所謂国学から差別づけるためであつて、同時にこれを以て国学をも含めた種々の學風を有する日本古典学の総称ともしようとするのである。

ところで、われわれの研究は、近世に於ける大阪和学の研究であるが、われわれの第一に着手しようとすることは、近世の大坂に於ける和学の資料の蒐集調査とその整理にある。これは、近年、資料が埋没もしくは散佚の傾向にあるから、研究のためにはその研究資料の蒐集整理からはじめる必要を感じたためであり、また、今日存してゐる資料も現在の如き混亂した世相にあつては、近き将来に於て、いん減しかねないおそれがあるから、今のうちにこれが保存と整理とに努めることの必要にして喫緊事たるを感じたからである。そこで、まず、大阪の和学者の編著書や遺稿の類の調査と蒐集に力を致したのであるが、さて、事をはじめようとすると、第一に迷つたことは、大阪の和学者の範囲をどの程度に定めるかであった。大阪人物誌等には一時的で在住者をも含めた大阪在住者のすべてを列挙してゐるやうであるが、他國の人で一時大坂に滞在したに過ぎない人を大坂に生れ大坂で死んだ生粹

の大阪人と同列にあつかつてよいものかどうか、たとへば、大阪言道とか黒沢翁滿とか中島広足とかを大阪の人と言へるかどうか、といふことになると、些か疑ひなきを得ない。大阪は諸国の寄合所だから、この著名人の一時的滞在者が甚だ多い。それを全部あげてゐたのでは、大変である。しかし、大阪生れでなくとも、大阪に長く居住し、或は大阪に墓所を有していて、大阪人としてこれを見てもよいかと思はれる人もすくない。契沖なども言はばそのうちの一人であるが、敷田年治とか萩原広道とかいふ人もまたこの部類を入れて差支へないであろう。また、大阪生れであるが、後半生を他国で送った上田秋成の如きもある。大阪生れで、大阪に居住し、大阪で死んだ生粹の大坂人の場合にはもちろん疑念はない。その他の場合は、これを大阪の学者とすべく、要するに程度の問題といふことになるのである。すなはちそこの程度をどこに置くか、われわれはこれに迷つたのである。また大阪人と言つても、旧大阪市内にこれに限るか、大阪府下出身者をも加へるか、さういふ点にもまた惑ひなきを得ない。大阪に於ける和学界の全貌を知るために、網羅主義の方がよろしいのであるが、大阪独自の特色を探らんとするには、網羅主義でない方がよろしいのではないか。要するに焦点のおきどころが問題となるのである。結局、われわれは、まづ大阪人独自の和学を明らかにから始めようとして、疑義のない、大阪生れの大坂居住者の学問を検討することから出発したのである。そして、更に進んでその余力を以て、その範囲を拡大してゆかうと思ふのである。

懷德堂の和学は、すなはちその立場に立つて最初に採りあげた課

題であり、それに関する資料の調査も一通り纏まつたので、その成果の一部を本号に公表する次第である。

一体、懷德堂とは、大阪に於ける漢学塾である。一時は、東都の昌平齋に対抗するの実力をもつた幕府公許の学問所であった。その沿革の詳細は、西村天囚著はすところの「懷德堂考」（大正十四年十一月刊）について看られたいが、享保十一年に創して、明治維新に廢するまで、百四十四年、大阪の文教に貢献したこと大なるものがあつたのである。

懷德堂は、三宅万年にはじまる。万年は号をまた石庵とも言つたが、もと京都の生れ、元祿十三年大阪に來り、尼崎町二丁目に居を構へ、儒を講じた。大阪の富豪たちが門下生となつた。享保九年の大火灾ののち、その年の十一月に尼崎町一丁目に門下生が相寄つて万年のために懷德堂を建てた。直門の中井繁庵が他の門弟と相謀つて、これを官許の大坂学問所となさんとし、享保十一年つひにその目的を達した。ここに懷德堂の規模が確立したのである。懷德堂の学主は、三宅万年にはじまり、そのあとを門弟の中井繁庵が受け、繁庵のちを万年の子の春樓が継いだ。この間に、大阪生粹の儒学者、五井蘭洲が助教としてその講学を助け、殊に繁庵の歿後は、懷德堂の事実上の中心となつてその学風を布き、繁庵の遺子、竹山、履軒の兩人を薰陶して後年懷德堂の名を天下に高からしめる基礎をきづいた。さて、三宅春樓の歿後は、たすけて懷德堂の学業を天下に重からしめた。その後、竹山の子の蕉園は偉才であったが夭折し、蕉園の弟の碩果が学主となり、

碩果の歿後は、竹山の外孫の並河寒景がそのあとを継ぎ、履軒の孫の桐園が碩果の養嗣子となつて、寒景をたすけ、相共に守成の功をなして、以て明治維新に至つた。このやうに、懷德堂は、萬年以来、代々漢学教授を以てその業としたものであるが、その門弟には、大阪の町人が多く、その中からは秀れた学者をも出してゐる。ところが、懷德堂は、和学にも若干の業績を示してゐるのである。懷德堂の漢学については既に天下の周知するところであるが、その和学については、纏つて論述せられたるものがあるを知らない。

懷德堂の中心は、五井蘭洲にある。蘭洲の和学は、主として父の持軒から受けけてゐる。また、三輪執齋に影響せられるところもあつたであろう。持軒は、元来朱子学者であるが、生粹の大坂人で、士耆人としての近世最初の儒学者であった。「懷德堂考」の語るところによると、五井の家はもと大和の出、持軒の祖父守香がその晩年に大阪に隠棲し、爾來大阪に住みついたのである。守香は和漢の学に長じ、詩歌を善くしたが、また節用集を著述してゐる。

日本紀の学を伝へたと言はれる。持軒はその守香の次子守純の次子であるが、祖父と同居してその庭訓を受け、家学を繼承した。蘭洲の著述である「蘭洲名話」には、次のやうなことが記してある。

「やまと訓山外なるは、予が家伝來の説也。他家の説にいはぬ事也。先考かつて貝原篤信と下河辺長流とにかくたられし。篤信は訛名をつくりて己が説とし、長流は僧契沖にかたり、契沖代匠記をつくりて己が説とせり。」

この文中、先考といふのは持軒をさすのである。持軒と益軒とは京都遊學の時の同門であり、下河辺長流と持軒とはまた交遊があり、持軒は長流から万葉集や古今集について教を受け、和歌をも見てもらつたりしたらしい。持軒の和学は、この「名話」の文でもわかるやうに祖父伝來の家学を受け、傍ら、長流に学ぶところもあつたと思はれるが、その伝來の家学には独自の見識があつたらしいのである。蘭洲は、このやうな父をもち、その父の衣鉢をついだのである。加之、三十歳にして東上するや、三輪執齋のもとに手頬つた。執齋は陽明学者であるが、同時に和学の造詣の深い人で、殊に和歌に秀でてをり、幾多の詠歌があり、家集もある。執齋は父の持軒の友人でもあり、また懷德堂が學問所として公許せられるのに陰の人として大いに尽した人でもあつたので蘭洲はこれに手頬つたわけであるが、この執齋の学風にもまた影響せられるところがあつたであらう。前掲の「蘭洲名話」にも、「としを経て花のかがみとのうた、凡池は年をふるにしたがひて、うき草みさび生て、もののかけをうつさず、此池ばかりは幾としへも清潔なれば、春ことの花の鏡となり、遂にくもる事なし、唯花のちりかかる時のみ、くもるといはんと也。すべて池を鏡にとりなしての趣向なりと、三輪子の物語に聞侍る」とある。執齋にも説を聞いた片鱗をこれにも記すことが出来る。

持軒には家伝の書や著書もあったのであらうが、すべて稿本として残つてゐたらしく、享保九年の大火灾の際に、悉く鳥有に帰したといふ。今、その著の残るものもあるを聞かない。

蘭洲は、朱子学を奉じ、餘の学を好まなかつた人であるが、そ

れでもその著書を通じてみると、非常な博識であつて、
神道や仏学にもくはしく、弓術などにも深い造詣があつたやうで
あり、和学の方にも数多くの著書を残してゐる。また和歌をも嗜
み、新題百首和歌等が残つてゐる。蘭洲の和学に関する著書とし
ては、萬葉集話、源語話、源語提要、古今通、勢語通の五部書の
外に刪正日本書紀がある。「蘭洲考話」は彼の隨筆集であるが、そ
の中には彼の学風や見識や、またその人となり等をうかがふべき
文がすくなくない。

懷德堂は堂規として、四書五經を講ずるを専らとし、かかる道
義の書以外の雑書は一切講じない定めであつたから、蘭洲ももち
ろん懷德堂に於ては日本の古典書を講義するといふやうなことは
なかつたと思はれる。蘭洲の和学は、その業餘のわざである。し
かも、この古典の講義を以て蘭洲は人倫の道を説きあかすことには
役立つよう志してゐる。そのことは、勢語通や源語提要をはじめ
め彼の著書の随所に見出しえることである。蘭洲には正妻がなか
つた。一妾を置いて、それに一女を生ましめた。その女の名を
「せつ」といふ。古今通や勢語通を見ると、これらはその一女の
ために著述する由が見える。その女の教養のために筆を執つたの
である。蘭洲は、このやうに公に和書を講ずることをしなかつ
た。しかし、その和学に関する著述は、忽ちその門下生の間に弘
まり行はれた。その著を写し伝へるものも數くなかったやうであ
る。その和学を受けた門下生の中で、最も名をなしたもののが、加
藤景範である。景範は蘭洲の古今通を刪補した人である。

景範は、通称を小川屋喜太郎のち友輔と改めた。大阪の折屋

町に住んで薬種屋をしてゐた。父は信成といひ、儒医であつたが、²⁴
その家学を繼いで、懷德堂に学び、五井蘭洲の教を受けた。号を
竹里（たかさと）といひ、歌道を以て一家を成した。歌は京都の
松井政豊の弟子である。政豊は鳥丸光栄の門人である。父の信成
は光榮の門人であつた。つまり、景範の歌学は、京都の堂上歌学
の流れを受けてゐるわけであるが、しかし、その古典学は、必ず
しも堂上の系譜を伝へてゐない。彼の自筆稿本である「新古今集
旧注補遺」等を見ると、むしろ蘭洲の系統に属するやうで、古典
考證の角度が全く蘭洲と一致してゐる。蘭洲は、さきに述べた如
く、和学を以ておもて芸にするものではないが、景範は、和学を
以て身を立て、和学によつて門人をとつた人である。景範の和学
は、歌道を中心としてゐる。そして、甚だ雜学的傾向が強く、著
書が非常に多い。また、その歌人としての傾向も著書に於ても、
有賀長伯に類似するところが多い。長伯と景範とは直接交渉はな
かつたらしいが、森繁夫氏の「人物百談」によると、長伯の子の
長因の大坂移住は、景範の奔走によつたらしいといふ。長因の養
子長收とは深い交渉があつたらしく、懷德堂文庫所蔵の「竹里書
簡集」には長收との贈答の手紙が多数收められてゐる。のちに長
收の女が景範の曾孫に嫁してゐるから、有賀家と景範とは、無縫
の間柄ではない。景範の歌学書はその数が多いが、就中、「國雅管
窺」は彼の歌論学説を覗ふべき書として、最も重んすべきもので
ある。「新古今集旧注補遺」については、拙著「新古今和歌集の
研究」に詳しく述べた。

一体、昔の儒学者には国書歌書に精通し、かつ、すぐれた和文

を物す人が非常に多い。五井持軒父子が、和学に通じてゐたのもまた此の時代の風潮に従つたのであろう。懷德堂の創始者三宅萬年も、中井麿庵も共にまた和学を好んだと言はれる。しかし、萬年にはその遺稿今に伝はるものもなく、懷德堂伝存の「萬年先生遺墨帳」にその和歌俳句の片鱗をうかがひ得るのみ。麿庵には、「とはずかたり」その他二三の遺稿があるが、和学に関する著述

藝庵の子の竹山にも、和文の著書があるが、和学に関するもの
が見当らぬ。その著書目録の中に「萬葉假音」と題するものがあ
る。未見の書であるが、その題名から考へるに、これは、萬葉仮
名に関するものであらう。竹山は、加藤景範と友としてよかつた
景範の藏山集を編するや、その跋文を書するなどのことがある。景範の「美なれ佐
和歌の添削を景範に受けたといふこともある。景範の「美なれ佐
保」といふ書物には、萬葉書きの仮名をいろは分けにして載せて
ゐるから、この竹山の著書も景範と何らかの関係があるのでな
いかと推察せられる。識者の示教をまことに。

五年、その後商中井木菟麿によつて活字翻刻せられ、博文館から発行せられてゐる。この書ののちに附せられた水哉館遺編目録によれば、履軒にはこのほかに「雕題伊勢物語」一巻、「雕題古今和歌集」二巻がある由、未刊稿本である。「百首贊々」は、小倉百人一首の注釈書であるが、主として加茂真淵の説を批判反駁したもので、實に履軒一流のものである。履軒の和学史はこれで見ると、

蘭洲や景範の系統を引かず、彼独自のものである。しかも、和学に深い素養があるとも見えず、漢学者の素人考へともいふべき説が隨處に見られる。しかし、多年の漢文読習による説解力を応用しての萬葉歌の解釈などには、その説の当否はさておき、その鋭い感受力には瞠目せざるを得ない。その文にもその説にも、履軒の人からが濃く出てゐるところに特色がある。

さて、懷德堂の和学には、蘭洲をはじめ、景範にも履軒にも、共通する特色は、漢儒の眼を以てわが日本の古典を見ようとしてゐることである。蘭洲が伊勢物語の中に業平の誠実の心をあとづけようとして源氏物語に勸善懲惡の作意をさぐらうとしたが如き、また、景範が新古今集の註訳の中で排仏的言辞を示してゐるが如き、いづれもそのことを物語つてゐるのである。また、その学風が文献学的であり、実証的であり、忠実なる本文解釈に立論の根拠を置かうとすることも、その共通する特色である。このことは、懷德堂の漢学の一大特色であるが、その学風をまた和学にも応用したのである。蘭洲や景範には、また北村季吟や僧契沖の説を相述したり批判したりしてゐるところがある。また「蘭洲若詮」を読むと、萬葉集の研究に当つて詞林采葉集にも眼を通してゐたことが分る。

思ふに、懐徳堂に於ては、蘭洲の和学が學問として一番すぐれてゐる。けれども、今日の古典解説から見ると、これらの古典学もあまり参考にならないかも知れない。ただ、われわれとしては、わが古典研究史上に於ける懐徳堂和学の位置づけのためにかつは、また大阪和学の展開とその性格とを究明するために、こ

これら一聯の懷德堂の和学を調査し研究するの必要に迫られたのである。

なほ、わたくしは、「語文」第三輯「契沖阿闍梨特集号」に、

「大阪の和学と契沖」と題して述べた拙文中にも、懷德堂とその和学について触れるところがあつた。併記して頂ければ幸甚である。

次に、加藤竹里には、前述のほかに源語解、萬葉韻譜、熟語通の註等があるといふ。また、やはり懷德堂系統の人で、蘭洲の教へを受けた人に川井立政がある。尼崎町の町年寄を勤めた人で、歌学を有賀長伯に受けた人であるが、この人の著述に「日本紀瑣言」「古史和歌通」ある由、大阪人物誌に出てゐる。かういふ書物は、わたくしには未見の書である。博雅の士の高教を得たい。絶じて、われわれ寡聞者の最も困難してゐるのは、研究資料の蒐集調査に当つて、その所在を知り得ないことである。公共の図書館や大学の図書館等にある図書は、その目録によつて比較的容易に検索し得るのであるが、そこに見出だし得るものは、われらの要求の九牛の一毛に過ぎない。われらの見聞の届かぬところの個人の蔵書中に或は寺の秘庫等に、有力な資料の藏せられてゐることが多いと思ふのであって、それの発見は、一に多數の協力によるよりはかはれない。大方の同情と協力をこの機会に懇願する次第である。われわれは、今、大阪の町人学者の和学書を博搜してゐる。

この特集号に発表し得た調査報告のうち、蘭洲の著書については、関西大学教授吉永登氏の絶大なる御同情と御協力を得てゐ

る。すなはち、同氏は惜しげもなくその珍藏の書を貸与せられ、かついろいろと示教を賜はつたのである。この機会に厚く感謝の意を表する。

以上を以て本特集号の総論とする。

(科学研究費による研究成果の一部)

——大阪大学教授——

本誌 横山 正氏 論文正誤表

掲載

第五輯
(貢) (段) (行) (誤) (正)
一一〇 上 二 関の…… 関の……
一一 下 一 日蓮記 目蓮記
一一 下 一九 延喜頃 延宝頃
一一 一九 (舍利) 「舍利」
一一 四 形式類似 形式句類似
一一 七 この段 この後

第八輯
(貢) (段) (行) (誤) (正)
一一三 下 二三 源七 源六
一一六 下 上 一〇 衰 衰
一一五 一九 釜打栗 釜打栗
一一 內容 鶴山 鶴山
一一 內面 内面